

Ep. 20

博物館と
自治体予算

「無料の時代」と情報システム

自由に使えるSNSに、スマートフォンの無料アプリ。マーケティング手法の先鋭化とあいまって、世の中には「無料」が氾濫しています。そんな中で、博物館の情報システムも「無料にできないのか」とのお声。実は、弊社も考えたことがあります…。

収蔵品管理システムを「使ってみよう」と思った場合、まず各社の製品について、パンフレットやWebサイト、デモを見て比較検討することになります。ここまではスムーズなのですが、問題はその後。公立館の場合、財政と情報担当部署に稟議を通さなければなりません、これが大変な作業なのです。

いや、いくら何でも、そんなご無体な…

先日、ある市の情報担当部署とお話する機会がありました。市内にある複数の博物館施設全体でデータベースを構築してはどうかという話題だったのですが、先様曰く、「かかる費用を観覧料の収入で賄えるようなシミュレーションと一緒に提案してくれないと…」とのこと。全国各地でよく聞く話です。

何でも、これから数億円かけて建物を改築すること。観覧料が300円と仮定すると、1億円でも有料来館者を30万人以上増やさなければならぬことになってしまいますが…。まあ、建物本体とシステムでは、必要度も違いますね、うん。

また、こんなお話もありました。「そのシステム、タダで使えない？ Facebookみたいに」。たいていのご相談は実現するよう努力しておりますが、それはいくら何でもご無体な…ということで、早々に退散しました。

全国各地の学芸員の皆様は、こうした議論でさぞお疲れなのだろうなあ…と、改めてそのご苦労を知る思いでした。

見た目は無料でも、必ず誰かが支払っています

今や、何でも価格競争の時代です。牛丼チェーン店業界あたりは、もはや1杯300円を割る水準にまで落ち込み、大手3社が10円単位で鎚を削る状態とか。消費者の立場としては、まあ有り難い話ではあるのですが、それが常識になるのもどう

なのかなあ、と個人的には思います。感覚がだんだん麻痺してくるような気がして、ちょっと怖いのです。

それを超越する「無料」が氾濫し始めたのは、駅で配布する情報誌が登場した頃からでしょうか。最近、ソーシャルゲームのCMが「実は事実上、有料だった」という問題が話題になりました。こうした体験版や機能限定版、あるいはPRや先行投資的なものも含めて、必ず誰か別の人がお金を払っています。

多くは、無料情報誌やFacebookのように広告収入を収益の柱としています。実は、弊社も一度検討したことがありまして。でも、全館を網羅できたとしても5,000前後という小さな市場ですし、仕事のたびに広告が表示されるのは、ちょっと…。

宣伝のようになってしまいますが、I.B.MUSEUM SaaSは、こうした議論の中で生まれたサービスです。しかし、やはりギリギリ最低限のお代を頂戴することにせざるを得ませんでした。弊社がもっと成長したら、完全無料にしたいのですが…。



受け継がれてきた歴史や文化の情報は、地域のアイデンティティそのものであるはずですが、確実に失われつつあります。博物館の資料データベースは、それを100年後も同じ形で残すと同時に、誰もが使える形で開放すべきもの。観光部門も企業誘致部門も教育部門も、「地域の正しい情報源」として参照し、2次・3次の利用を経て、住民に利益を還元できるもの。

本当は地域行政の義務と言うべきなのですが、なにぶんお金がない自治体の現状では、なかなか投資に踏み切れない。それは、無理もないことです。でも、誰かがやらなければ、地域の「魂」は朽ちていく一方。博物館専門の開発業者として、何とかしなければ…と思うばかりです。